

「方法論の私的試みⅡ—なるの自覚」

大西 昇*

Realization of NARU—A Methodological Study (Part II)—

Noboru Onishi*

There are two types of fundamental "whereabouts" for humankind. One is a belief in a supernatural Being (GOD); the other a belief in a natural Being (SHIZEN [Nature as it is]). But now these two beliefs are in danger of total extinction. So it would be imperative that we create new fundamental "whereabouts".

【はじめに】

この小論は、前拙論「ナルの自覚---方法論の私的試み」を引き継ぎ、より問題を一般化する方向で検討することを目標にしている。前論の不備を補う意図もある。ただし、見通しのための提案と問題提起に過ぎず、粗い見取り図を出さない。それぞれ問題は詳細綿密に検討すべき課題として我々の前に在る。言い換えれば、いささか方法論的反省をする中で突き当たった幾つかの課題の、粗雑で部分的な鳥瞰図に過ぎない。「提案」としたのは、これらが前拙論でも述べた如く、個人の能力をはるかに超えた課題であることに因る。

*表記についての断り書き：古代日本語はカタカナ表記にした（ナル オノヅカラ など）。ひらがな表記である場合には、古代に限定せず現代に至るまでの日本語としての表記である（なる）〔オノヅカラの現代表記は「おのづから」であるが、本論では「おのづから」にした〕。また、簡単な説明は註にゆずるが、自然の語は便宜的使用である。^(註1)

これまでの幾つかの小論において、主にナルとオノヅカラという古代日本語の検討から、「ナルの余白構造」と名付けた、古代日本人の心性のある特徴的な構造を抽出し、考究を続けてきた。それはカミの、ひいては人間の意志と意識に空白（余白）があ

ると考えたものである。^(註2)

今までの検討も決して十分なものではなく、残された課題も多いが、この小論では「ナルの余白構造」を「なるの余白構造」として、古代に限らず、古代以後現代に至るまでの日本語「なる」に拡げることが意図している。

それは前論で述べた次のことを研究の動機としているからである。「わたくしは、今までの幾つかの拙論において、古代日本語の検討を通して古代日本人の心性を探求してきた。それは古代に限ることなく、日本人の心性の構造解明を遠い千里の目標に置く、「一步」の試みであり、日本人であることの自覚（それは「人間の自覚」であるが）を目指している。」

言い換えれば、「ナル」を「なる」に替えて現代の、あるいは現在脚下の問題として考えてみたい、ということ動機の基としている。しかし、断るまでもないが、ナルないし「なる」の余白構造の理解がそのまま現代の問題への解決策・解答となり得る、などの類のことを考えているのでは決してない。

ではあるが、上に述べた作業は我々自身の相対化という側面を持っている（自覚は自己の相対化をもたらす）。それは同時に「西欧」の相対化でもある。

何故「西欧」であるのか。欧米という言葉があるように、アメリカを含む場合もあるが、簡便のためにその場合も含めて「西欧」の表記を取る。

これまでの拙論においても参照項として常に「西

* 東京工芸大学工学部基礎教育センター非常勤講師
2009年9月30日 受理

欧」と比較してきた。他の参照項を問われることもあろう。しかし、「西欧」が「普遍」として全地球を覆い尽くそうとしているのが現状であり、我々にしても明治維新とは「西欧化」に他ならない面を持っている。現在の我々の西欧化は著しいものがあり、それが表層に留まっているのか、あるいは深層近くまで突き進んでいるのか、その程度は未だ不明である。つまり自分自身すら明確には分かっていない。この状態を克服するためには、真の「西欧」そのものを理解する必要があり、「西欧化」が何であるのかを冷静に見直す必要がある。そうでなければ我々の自律・自覚は不可能である。これは、我々に限ることではなく、すべての非-西欧圏に言えることであるべきだ、と私は考える。したがって何よりも先ず「西欧」の相対化を考えねばならない事情に我々は置かれている。それは一言で言えば、かつて Max Weber が考えたような「普遍」への疑いである。一種の平衡感覚であって、現代文明の《片寄り》に対する疑問である。

【1】余白構造について1

ナルーなるの本来は、「オノヅカラ-ナル」であり、また「おのづから-なる」であって、日本の思惟と感性さらに生活の仕方さらには生存の根本的在り方の中核をなすものとして働き続けてきた、また現在でも根底で働いている、というのが私の基本的な前提である〔我々の内なる古代日本人〕。^(註3)

スルとナル、あるいはツクルとナルなど、対比的に論じられることが多いかも知れないが、古代日本の原理としては、スルもツクルもナルに包摂され支持されている、というのが「ナルの余白構造」である。

「ナルの余白構造」から「なるの余白構造」に移行する場合には、より一般的な形にすることは当然であるが、その際新たに検討すべき点も多いであろう。「ナルの余白構造」は古代日本人の心性の在り方であり、オノヅカラナル働きへの「信」を中核としている。時代が下がるにつれてこの「信」は弱体化していきつつある（一種の「世俗化」）、と考えられるが、それにもかかわらず、この「信」が根源に関わっているが故に、先にも述べたように、「なるの余白構造」の根底には「ナルの余白構造」の核が

存続している、と考えられるのであって、「ナルの余白構造」の原理はそのまま「なるの余白構造」の原理としてよいであろう。

それは、自己がかかわっていることに、人間（自己）を超える大きな力が働くことを受け入れていることを意味している。その「力」はオノヅカラナルの場合は「自然」であった。「信」の弱体化の過程で、この「力」が、「人間（自己）を超える」という基本契機を失うことなく、自然だけでなく、社会、時代、世間、共同体、時勢、流れ・・・などなどに、言わば「応用」されていった歴史を我々は持っている。

さて、「おのづからなる」は、現代では「自然に～なる」「ひとりで～なる」と理解されやすく、人間の力が加わらないで、人間の手がかかわらないで、などの意味とされよう。しかし、日本語としては、この常識的な理解に反して、人間の行為を含む場合をも表現することがある点に注意しなければならない。したがって前段の「人間（自己）を超える」（人間・自己ではない）という事態も常識的な意味ではない。

この点に注意を向けて、「おのづからなる」理解の補助として、この「原理」に何らかの程度で連なっていると考えられる実例を、不十分ではあるが、以下に二、三挙げることにする。

現代でも名工と言われるような職人（に限らないかも知れない）が、その「作品」を自分が「作った」というより「そのもの」が「成った」のだ、というような主旨のことを語ることがある。これは、当然、当事者以外から見れば作者の作品であるが、当事者はそうとばかりは受け取っていない、ということを語っている。

次は一見全く関係ないように見えるかも知れない。

「色気は本来無意識のものであるから、生まれつきそれが備はった人と、さうでない人とがあって、柄にない者がいくら色気を出さうと努めても、唯いやらしく不自然になるばかりである。」谷崎潤一郎「恋愛及び色情」

「放縦で露骨なのよりも、内部に抑えつけられた愛情が、包もうとしても包み切れなくて、ときどき無意識に、言葉づかひやしぐさの端に現れるのが、

一層男の心を惹いた。」同上^(註4)

ここで谷崎潤一郎が言おうとしていることは、いわば「おのづから」なく色気>であると考えられよう。より正確に言えば、<色気>とは本来「おのづからなる」ものでなければならない、という見解である。したがって「おのづから」に深く関連している語が頻出しているのは当然のことであろう。「無意識」「生まれつき」「柄」「柄にない」「不自然」「包み切れずに端に現れる」などなど。さらには「柄にない者がいくら努めても」というところは、「おのづからなる」を離れた「つくる」を思わせる。何故なら「柄」とは「おのづから」の領域の事柄である^(註5)。「無意識」については、ここでは、それは「余白」であって、Freudのそれとは異なる水準のものだけ言うに留めたい。

次に「古色」「時代がつく」などの表現は、余り芳しくない意味の場合もあるが、一方積極的な評価をされる場合もある。両方共に、人間の力ではない。

「藤原氏三代の偉業、西の京に模した市坊は、今も猶残壕と礎と古寺とを留めて、金色堂の古色は暗い杉樹の裡にその光を残した。」田山花袋『生』

「遺作の様頗る古色あり」「敦盛の像及甲冑古色可掬、大小二笛高麗笛古色なり。」 鷗外『伊沢蘭軒』

「軸は底光りのある古錦襷に、装幀の工夫を籠めた物徂徠の大幅である。絹地ではないが、多少の時代がついているから、字の巧拙に論なく、紙の色が周囲のきれ地とよく調和して見える。」漱石『草枕』

次は、いわゆるA級戦犯として処刑された広田弘毅の直前の言葉とされているものである。^(註6)

「自然に生きて自然に死ぬ」

この「自然に」、特に後者（絞首刑という不自然な死を強要される直前の語）を例えば *naturally* とすることは不可であろう。判決直後では「この判決はカミナリに当たったようだ」と語ったとされる。^(註7)

次のものは前論文でも引用した今西錦司であるが、「生物はおのづから進化すべのくして進化した」。^(註8)

「自然とはわれわれをはぐくみ育てる慈母にもたとえられるべき存在・・・中略・・・私の棲み分け理論も、私の進化論も、みなこうした自然観と矛盾するものではない。むしろこうした自然観に根を

おろしたものである、といったほうがよいのかも知れません。」^(註9)

主に Darwin と比較した場合の自然観のちがいは、「宗教をとおした自然観」のちがいとされていて^(註10)、とりわけ前文は、別の立場から見れば何も語っていないに等しいと受け取られるであろうが、これこそ「なるの余白構造」の一例と考えられるのである。

次も今までにも何回か引用したものである。

「句作りに、成るとすると有り。内をつねに勤めてものに應ずれば、その心の色句と成る。内を常に勉めざるものは、ならざる故に私意にかけてする也。」『三冊子』^(註11)

芭蕉の外から見れば、作品として完了するまで芭蕉は能力の限りを尽くしている。外からの観察では、最後まで「つくる(する)」作業の連続である。したがって作者はあくまで芭蕉である。しかしながら、当事者は「つねに勤めて」いながら、内的には「なる」働きを意識している。であるから、そこに「なる」と「する・つくる」を区別する客観的な目印は無い。では「ならせた」主体は芭蕉ではないのか。そう問うた時、この「ならせる」は芭蕉言うところの「する」の一種である。

最後はしばしばナルの余白構造の例として挙げたもので、いわゆる神武東征の折、大和平野に進軍しようとする時のものである。

「天皇、又因りて祈ひて曰く、「吾今當に八十平瓮を以て、水無しに飴を造らむ。飴成らば、吾必ず鋒刃の威を仮らずして坐ながら天下を平けむ」とのたまふ。乃ち飴を造りたまふ。飴即ち自づからに成りぬ。」神武天皇即位前紀

これは、神武があるところまで作り、その後ある時点からは「何か」が作って全体は完成する、ということではない。たとえ神武が最後まで「作って」いても、行為者の意志と意識に空白(余白)があつて、本文のように最終的には「なる」という表現を取る、と理解できるのである。

以上幾つかの例を見ても、人間の「つくる・する」が第一に置かれているのではなく、何がと明確に言われていないことが多いが、それら人間の行為を成し遂げさせる働きを第一にしている、ということが伺えるのである。古代日本に限れば、それをオノヅカラナル働きとしたのであった。

【2】余白構造について2

さて、「なるの余白構造」を《現在》あるいは《現代》の問題として考えると、先ず次の視点から始めなければならないであろう。

- (A) 対一自
- (B) 対一他
- (C) 自他共通

簡便な説明をすると、Aは我々の自覚の問題であり、Bは他との対話の問題である。原理としては、AがBを可能にするが、実際の作業ではAからB、BからAの往復運動となるにしても、Aがあくまで主でなければならない。

叙述の便のために、以下臨時に主に思惟の問題として述べていくことにするが、事柄自体は思惟に留まるものではないことは当然である。上のAとBの作業は、先ず、「西欧」の思惟の《相対化》である。それはまた我々の相対化でなければならない。日本の独自性を主張するものではない、とこれまでも再三述べてきた所以である。すなわち、西欧の一種の「絶対化」に代わって今度は我々を「絶対化」するのでは意味がない。そう考えてくると、我々の相対化にしても、全地球規模で見れば、多数の相対化の一つに過ぎない。

もう少しこの「日本の独自性」の主張ではない、ということの意味を考えてみたい。誤解されやすいであろうが、わたくしは、古代日本人のこころの「復活」、つまり、日本の独自性を強調して、現代の我々の中への取り戻しを主張しているのではない。先ず我々の中核に、古代日本人が生きていて、我々の長所と短所の多くは、ここから出てくるとの認識が第一であり、この自覚から出発して、我々は何であり、これから何をすべきか、を追究し苦悩することが我々の歩むべき道ではないか、と考えているに過ぎない。すなわち、古代人のこころや生き方を、現在の我々がそのまま再現することなど当然不可能であるから、我々がすべきことは、我々の本心の自覚から歩み出すことであり、ここから真の一步が可能となるはずである。

さらに、この独自性の主張ではないという留保には、単に誤解を防ぐ意味を超えて、もっと積極的な意味がある。それは意識と意志のあり方と生き方の

根源的な形態という見地から、その一つの例として日本の場合を考えているということである。

したがって、これらの作業は、全地球規模の新たな思惟に、それは結局新たな「文明」*の姿に繋がる役目を担っている、と考えられる。私は以上のようにこの作業は、一個人の力をはるかに超えた、全地球規模の課題と考える。

*文化 Culture と文明 Civilization の定義は今のところ一定しているとは言い難い。したがって、ここでは、Technology をも含んで Civilization の方を使うことにする。

そこで我々の問題としては、差し当って次の二作業となろう。

(1) 我々の内なる古代日本人の自覚（日本人の問題）

(2) Nature と対比した「なる」の構造を現代文明の問題点の一参照項とする（日本を超えた問題に連なる）。その目標は「西欧の相対化」である。それは同時に「我々」の相対化でなければならない。

要するに、現代の文明の問題点に対する、一つの参照項としても「なる」の問題を考えてみたい。先に述べた如く、「なるの余白構造」を「解決策」あるいは「答え」ということでは決してない。またこのままで良いという「全面肯定」でもない。しかし、現代文明への参照項としては有効であると考えている。

【3】根源的居場所

前拙論^(註12)で提出した、自然と超自然の図式は、粗雑の感を免れないであろう。なお不十分ではあるが、以下いささか補足をするにしたい。粗雑であるとは、複雑な様相を呈している事態を極端に単純化し過ぎている、ということであろう。しかしながらまた一方で、人間生活の根源に関わる一つの基本的な区分の図式としては有効である、とも考えられるのである。

そこで、論を進めるにあたって、次のような前提の下に進めて行くことを、先ず説明しなければならない。

すなわち、いわゆる文化圏、精神圏、言語など人間生活の内容を規定すると考えられている契機は、

鳥瞰図としては、自然に対してどのような根源的姿勢を取っているか、が分岐点となる。

この前提に立つと、

(イ) 自然を超えた存在ないし在り方を前提する

(ロ) そのようなものを前提せず、いわば自然のみという二組が考えられる。これ以外はあり得ないと、にわかには決められないが、しばらくこの二つで考えていくことにしたい。その場合、これまでの拙論においては、前者の代表的な例としてヘブライズムを考え、後者の《一例》として古代日本を取り上げたのであった。その際、この古代日本の核とも言うべきものは、ナル、オノヅカラ、オノヅカラナルなどに内包され、表現された（「余白構造」と名付けた）意志と意識の構造である、との仮説を立てたのであるが、これが日本独自であるか、あるいは他にも指摘できるような構造であるかは未検討である。したがって、再三の繰り返しになるが、日本の独自性を主張しようと意図するものではなく、私が日本語で育ち生活している日本人ということから、古代日本を取り上げたに過ぎない。したがって、地球規模では、日本の場合とは異なる「自然のみ」の形態の可能性は十分考えられるところである（同様にイの「超自然」の場合も）。

先の前提は次のようにも考えることができよう。自然に対する根源的姿勢、すなわち自然に対してどのような基本姿勢を取って生存・生活しているか、ということは人間の生存・生活の根本であると考えられる。その根本の場所を、ここでは仮に「根源的居場所」と名付けると、自然に対する根源的姿勢・態度によって区分けするということは、それぞれの根源的居場所による区分である。

それは、根源としての《自然》との関わり方を、人間の根本原理と考えていることを意味する。したがって、あの図式は、自然との関わり方を第一義とする立場と、超自然との関わり方を第一義とする立場の区分とも言えよう（誤解を避けるために一言すると、この後者の場合、自然が無視されるということではない）。〔現代語の自然が名詞であることから、それとの対比で「Supernature 超自然」という表現を取ったが、むしろ以下のように形容詞・副詞で対照した方が適切であるかも知れない。〕

α : übernatürlich, supernatural と natürlich, natural

〔超自然と自然〕

β : おのずから、自然に、自然な（「超自然」を欠く）〔自然のみ〕

「超自然と自然」と「自然のみ」は、それぞれ様ではなく、多様な形態を取っていると考えられるのはもちろんであるが、特に α における超自然と自然との関係は、以下で少々触れるが、我々にとっては微妙かつ複雑で一筋縄ではいかない。

ここでの関心からする肝要な点の一つは、相互に自己の立場を固執することの弊害である。例えば、 β を内在的として超越性を欠くという理解は、不適切であって、 α とは別種の超越性を認めなければならない。ナル（なる）の余白構造は、その別種の一つとして考えられるのである。

以下、上の図式の理解にいくらか資する意味で、時間意識とでも言えるものを少々考えてみたい。

ヘブライズム（ α ）は超自然と自然の二重構造との理解は可能である。これを例えば時間意識、歴史意識に例を取れば、Paradise Lost と Paradise Regained が《対》になっている。すなわち、時間・歴史は前者で始まり後者で終わるのであるが、また両者は一体とも言えるのであり、それを可能にしているのは超自然と自然の二重構造である。これに対して、「自然のみ」の世界（この例では「おのづからなる」の世界）では、相対的表現を取ると、いわば一重（ひとえ）である。現実的と評される所以だが、その評は現実とは異なる別種の「現実」を所有している（二重の）立場からのものである。

上の意味での「一重」ということをもう少し説明すると、例えば、よく指摘されることであるが、「この世」と「あの世」の境があいまいである。

イザナミは古事記上巻では、

「其の神避（かむさ）りし伊邪那美（の）神は、出雲（の）國と伯伎（ははきの）國との堺の比婆（ひば）の山に葬（はふ）りき。」と言われている。

風土記では、

「即ち、北の海濱に磯あり。腦（なづき）の磯と名づく。高さ一丈（つゑ）ばかりなり。上に松生ひ、芸（しげ）りて磯に至る。里人の朝夕に往來へるが如く、又、木の枝は人の攀ぢ引けるが如し。磯より西の方に窟戸（いはやど）あり。高さと廣さと各六尺ばかりなり。窟の内に穴あり。人、入ることを得

ず。深き浅きを知らざるなり。夢に 此の磯の窟の邊(ほとり)に至れば必ず死ぬ。故(かれ)、俗人(くにひと)、古(いにしへ)より今に至るまで、黄泉(よみ)の坂・黄泉の穴と號(なづ)く。」出雲國風土記 出雲郡 宇賀郷

現代の事例でも、墓や仏壇に話しかけることは極く普通の日常事である。津軽半島の地藏信仰では、亡き子をかたどった地藏に食事、衣服を与え、化粧をほどこす。墓が村道の両側にある村も多い。あの世はこの世に在る、と言ってもおかしくないほどである。

さて、これまでの拙論では、「古代日本語ナルの発想と意味内容の分析、さらにはその発想を抽出して論理化する、すなわち《ナルの論理》とでも言うべきものを抽出し外在化する作業」を目標にしてきた。しかしながら、これは事の半面を視野に入れていなかったかも知れない。例えば、「ままだ」「そこはかたなく」「ほのかに」などなどを、「あいまい」な姿勢・態度と見るのは常識かも知れない。しかし、この「あいまい」を積極的に、ないし肯定的に受け取ることを考えて見たい。そうすると、「あいまい」すなわち、本来明瞭にはし難い事態に対する反応と理解することになる。そのような事態をその《ままだ》(マニマニ)にしておこうという姿勢・態度である、と理解するのである。この顕著な例の一つとしての時間の受け取り方を見つめることにする。

【創世記】1章1節「初めに、神は天地を創造された。」

【古事記】上巻 「天地(あめつち)初めて發(ひら)けし時、高天の原に成れる神の名は、天之御中主神。次に……。次に……。次に國稚(わか)く浮きし脂の如くして、くらげなすただよへるとき、葦牙(あしかび)の如く萌えあがる物によりて成れる神の名は、うましあしかびひこちの神。……次に成れる神の名は、次に伊邪那岐神、次に妹伊邪那美神。」

【神代上】「一書(あるふみ)に曰はく、天地初めて判(わか)るるときに、一物(ひとつのもの)虚中(そらのなか)に在り。状貌(かたち)言ひ難し。其の中に自づからに化生(なりい)づる神有す。國常立尊と號(まう)す。」

「一書に曰はく、古に國稚(い)しく地稚しき時

に、譬へば浮膏(うかべるあぶら)の猶くして漂蕩(ただよ)へり。時に、國の中に物生(な)れり。状(かたち)葦牙(あしかび)の抽け出でたるが如し。此に因りて化生(なりい)づる神有す。可美葦牙彦舅尊(うましあしかびひこちのみこと)と號(まう)す。」

創世記に発して、例えば Augustinus の時間論などに自覚化されて行くヘブライズムの時間意識と記紀冒頭の時間意識を比較するなど鳥澁の沙汰だと言われるであろう。ただし、その発想を鳥瞰的に俯瞰した場合には、そうとばかりは言えない面もあると考えられるのである。一方は、先にも触れたように時間に始めも終わりもある。これはある意味で時間を超えた見方である。他方は、たとえ「初め」という表現が取られていても、始めも終わりもあいまいである、と言わざるを得ない(「初め」が反復可能な「繰り返す原初」について拙論を参照された¹³⁾)。したがって時間の外(時間を超える)は、自然の外(自然を超える)同様考えも及ばないことなのである。

ここで文明化という観点から、前者は先進であり後者は未開であるとするのが常識かも知れない。だが、時間の中で生きている人間にとって、時間というこの結局は「分からない、ないし分かりにくい」ものは本来「はっきり」したものではないのではないかと、という疑問も簡単には払拭できない。それを始めと終りがあると見る意識には、あいまいなものを「明らかなもの」にする「決断」があると見ることも出来るのである(「あれか これか」)。したがって決断をした意識からすると、記紀の冒頭は「あいまい」と映るしかないであろう。要するに、ヘブライズムから発した時間意識はある種の明晰性を持っている、と考えられるのであり、それに対して記紀の時間意識は、相対的にはあるが、「あいまい」な時間を「そのまま」(マニマニ¹⁴⁾)受け取っている、と考えることも可能であろう¹⁵⁾。同時に、前者には決断性が見られるが、後者はこの決断性を欠いていると言えよう。

【4】 Kant と Rudolf Otto

この節は、前節で提案した図式の理解に、幾らか

資することを目的としている。

すなわち、この節で Kant と Rudolf Otto に少々触れる意図は、彼等が言う in der Natur や natürlich などが、おのづから、自然な、自然に、などと如何に相違するか、さらには ausser der Natur や übernatürlich などと言われている事柄が我々の理解の彼方にあることに、注意を向ける期待からであるが、それだけではなく、前者と後者の相違が「ある程度」などで処理できる域を超えており、原理的に異なる、というのが私の基本の立場であることも改めて言い添える必要があろう。したがって、カントとオットーの批判でも検討でもなく、ここでの関心から一材料として取り上げるに過ぎず、非常に一面的なものであり、偏頗な取り扱いと評されるかも知れない。以上の関心から、両者の主概念は原語のままにする。この二人の選択は恣意的なものであるが、また両者が誠実な思索者であるということもある。

カントは、その "Kritik der Urteilskraft" (『判断力批判』) の第二部で Teleologie (目的論) を追究している。そこでは目的論の見地から見た Natur が主題となる。

目的論から見た Natur の目的連鎖 (Naturzwecke 自然目的) を問題にすると、Natur の最終目的 letzter Zweck は人間とされる。しかしそれは Natur のみ、つまりカントの表現では in der Natur (自然の内) でのことと限定すると、成立しない。単に Natur 内の存在としてだけで見た人間は、Natur の中で特別な地位を占める寵児 Liebling では決してなく、その一構成員 Glied に過ぎない^(註16)。人間が Natur の最終目的であるためには、ausser der Natur (自然の外) が必要とされる。つまり、人間を Natur の目的連鎖の最終目的とするには Natur だけでは不可能であり、Natur の外すなわち Natur を超える契機が必要となる。その場合の人間は Endzweck der Schöpfung (創造の究極目的) であるが、Endzweck とはその可能性のために自己以外の目的を必要としない Zweck を言う^(註17)。この意味での人間は、単なる Natur の最終目的すなわち Natur 内目的連鎖のいわば最高地位を超えている。それは moralisches Wesen (道徳的存在) としての人間である^(註18)。

ausser der Natur ということ補足すると、カント

は何故 Natur は実在するのかの理由 Grund は、ausser der Natur に求められねばならない、と言っている。^(註19)

カントの精密巧緻な理論が上のような粗雑な叙述で捉えられるものではないのはもちろんであり、Naturzweck という概念にしても、はるかに広く深い構造を持っている概念であるが、この小論の関心からすると、カントの言う Natur が、我々の「自然」とは異なる次元にあることが知れることで十分である。主な点を挙げると、

- 1) Natur は創造された、すなわち被造物である。
- 2) ausser der Natur (自然の外)

の二点であるが、この両者とも「自然のみ」(おのづからなる) には見ることができない。

次にオットーの主著 "Das Heilige" を見ると、ここでは natürlich と übernatürlich が厳格に区別されている。オットーのキリスト教以外の宗教にも公平たろうとするこまやかな精神にも関わらず、自然の世界は真の宗教の前段階に在る領域のこととされる^(註20)。とすれば、「自然のみ」はその「前段階」の範疇に入り、当然その宗教は前段階の宗教となる。それでは真の根源にかかわるものではないことを意味するであろう。

あるいは、宗教の起源ないし原初形態の「自然への恐怖」説は、西欧から出て、現在までには修正や否定が加えられてきてはいるが^(註21)、しかし私見では、この説の背後には、西欧人自身の自然への恐怖が潜在していると考えられるのである。オットーは、この「自然への恐怖」の宗教を皮相的には否定せず、真の宗教の前段階として理解しようと努めている。しかしながら、この「自然への恐怖」理解は、それでは不十分であると言わざるを得ない。すなわち、前段階と考えるべきではなく、別種の信仰を見るべきである。要するに、オットーですら、超自然の信仰に偏向した見方を脱していない。

言い換えると、natürlich にしろ、übernatürlich にしろ、オットーはヘブライズムの伝統^(註22) に忠実な理解をしている、と言えるであろうが、そのオットーの「前段階」などの考え方には、非-ヘブライズムをも認めようとする姿勢が伺えるにもかかわらず、やはりヘブライズムから出る視点を見出すことは出来ない。それは「伝統」から自己を引き離すことが如何に困難か、ということ語っている。

しかし、以上は超自然の信仰の否定を意図しているものではなく、超自然の信仰の立場からの、別種の信仰への偏向した評価に賛成できかねる、と言っているに過ぎない。と同時に、カントにしるオットーにしる、我々自身の「偏向」への自戒を教示している、とも言えるのである。

【5】超越性

これまで【2】に挙げた(C)については言及するところがなかった。それは主としてその検討までに考えなければならぬことがあったからであるが、ここで「超越」ということを考えることによって、(C)の問題の糸口としたい。

まず、以前の拙論「『オノヅカラナル』について」^(註23)で、超越性について少々触れた箇所の幾らか修正したものを以下に述べることにする。

超自然 *supernatural*、*übernatürlich* という発想の無い「自然のみ」の場合、想像力は自然の領域から十分に自由ではなく、具体的なものに寄り添うことが多くなろう。しかしこれを内在とのみは規定できないことに注意しなければならない。自然を「内在」と受け取ることは、自然を *nature*、*Natur* として考えていることを意味する。したがって、超自然の超越性とは異なる、別種の超越性を認めなければならない。

ここではそれを、仮に二つの意味で考えることにする。一つは、人間存在をはるかに超えている、そして人間存在を含むすべてを支えている、という意味であり、もう一つは、人間に自己を超えることを促す(オノヅカラ・おのづからは理想であり、また規範である側面を持つ)という意味である。

我々現代人に、このような超越性を理解しにくくさせている原因の一つは、次の西谷啓治の言う「超越の場に於ける虚無」であると考えられる。

「物質」を基底とする自然界という世界像が、世界からも、世界のうちなる人間からも、「超越」の次元への通路を除き去ったのである。……神も仏も無くなったといふ、超越の場に於ける虚無である。」^(註24)「現代文明と禅」

例えば現在では死語である「御天道様(おてんとさま)」にも、上記二つの意味の超越性を指摘できると考えられるのである。

上で説明したような、これまで「内在」とされてきたものに超越性を認めることが、先ず必要なことである。それをここでは仮に、「自然のみ」ないし「自然」の超越性と名付けることにしよう。(この「自然」すなわち「超越」に、祈りと願いと信が捧げられる。)

要するに、「超自然」と「自然」という二種類の「超越」のそれぞれが、相互に認め合うことは、架け橋となって、共通の場の創設につながる故に、何よりも必要なことである。

だが、我々の自然理解に決定的に欠如しているのは、この「自然のみ」の超越性への顧慮である。

「自然」(おのづからなる)への《信》^(註25)の喪失は、また「自然」からの超越性の喪失を意味しているのである。一方、「おのづからなる」の自覚は、「自然」の超越性の内容を豊かにし、深めていくことになる。

二種類の超越への《信》について理解することは、人類の思い上がり *Hybris* と都合 *Egoism* に対する防波堤になり得る。その意味でも両者は認め合わなければならない。現代文明は、「超越」を喪失していれば「人間のみ」の歩みを進めているのである。したがって、「人間のみ」がこの先人類をどこへ導いて行くかの反省が緊急事だということである。ただし、古代そのままのオノヅカラナルの復活の主張でもなければ、*übernatürlich* に過去そのままの *GOTT* 信仰の復活を主張するものでも、もちろんない。

【6】西欧の相対化

「西欧の相対化」については、もう少し説明する必要がある。

「西欧」自らによる自己の相対化は既に始められている、との見解もあると思われる。例えば人類学系の諸学では、主に19世紀のいわゆる進化論思想に影響された考え方は「払拭」され、地球規模では種々の独自な成長を遂げている諸文化(*Cultures*)が認められている。しかし私見では、それは「総論」において認められてはいても、各論ではそれに反して、根本において西欧的発想からの概念と方法を脱却したようには見えない例が多い、と言わざるを得ない。この状況から脱するには、「西欧」と非-西欧

の各文化圏でそれぞれ「力行」が要請されるであろう。これは全地球規模でそれぞれ果たされるべき、現在の文明の課題であると、私は考えている。

さて、西欧の相対化は、二種類に分かれる。一つは「西欧」自身での相対化、これに対して多数の非-西欧の、各々自らへの内省による相対化である。「おのづからなる」の余白構造は、この内省の一つとして提出するものである。

それは自己は何であり、また「西欧」は何であるか、という問である。それは自己と「西欧」の相対化であり、新しい文明の模索である。

「西欧」自身から、自らの過去への思想的反省、例えば過去の「普遍主義」を独善的と否定する反省が生まれ、いわゆる「多元主義」などが主張されていることは知られている。この「反省」は現代文明の問題として十分意味を持っていると言えよう。しかし、それは非-西欧の人々の「反省」ではない、というこの分かり切ったことが無視されているに近いのが現状ではないか。この「西欧」の反省に、我々がそのまま乗ることの軽率さと危険性は、いくら強調してもし過ぎるということはない。したがって、以上のことは「西欧」の問題ではあるが、よりはるかに我々の問題であることを自戒しなければならない。

さらに付言すると、この「西欧」自体の反省にも西欧的偏向がないか、は検討すべき課題である。

以上は余りに大きさに聞こえるかも知れない。しかし、我々は現在如上の問題を突きつけられている、と考えざるを得ない。したがって、私のしていることは一提案を出さず、この課題そのものが、一つの圏また一人の出来ることをはるかに超えているのは明らかである。

【7】自然の死

「西欧」の相対化の一つの例として、「自然の死」ということを考えてみたい。これは「西欧」に留まらず我々自身の切実な問題でもある。さらには「文明」の問題であり、現代が抱えている地球規模の問題である。^(註26)

かつて「西欧」においては「神の死」が言われた。それは既に過去のこと、あるいは我々には関係しない事柄であるように見える。しかし、現在脚下の問

題として、その「西欧」出自の Natural Science によって「自然の死」が生じた、という半面を考えなければならない。もちろん、自然そのものの死ではなく、我々の自然像が内包する死である。つまりは我々の心が自然の死を産み出している。

「神の死」が言及されることは多いにしても、「自然の死」は余り言われぬかも知れない。もちろん我々の周囲では、自然破壊と言われる現象が多発していて、例えば、山間地においてさえ昆虫は減少している。しかし、ここで言う自然の死は、自然自体が現在死滅しつつある、という類のことではなく、自然は我々には無関係であるという冷たい「認識」が、我々の心の底にうずくまっているということである。自然の側の死ではなく我々の側の死である。

以上にはもう少し説明が必要であろう。

自然科学者の自然観と非-自然科学者である我々の常識とは、全く同じと言うことにはならないであろうが、共通するところもあると考えられる。こう言うと、中には肯んじない自然科学者もいるかも知れない。だが、近代自然科学の自然観の影響を我々は知らず知らずの内に受けていて、これは否定しようがない。この影響を一言で言えば、自然は我々人間とは本来的には無関係という冷ややかな「認識」である。あるいはそれにも肯んじない自然科学者が存在するかもしれない。しかし先に述べた「影響」は紛れもなく近代自然科学の産み出したものである。

しかし、さらに言えば、人間と無関係な自然像は、近代自然科学の誕生が「神」の追放に依ることの当然の結果である。「神-人間-自然」の階層から「神」を外し、自然を自然自体の規則（自然法則）によって、いわば「自動的」に働くとする自然像（自然の自発性）からは、当然人間も（そのように理解された）自然の外にはじき出されるはずである。

一例を取ろう。Galileo Galilei (1564~1642) より60歳若い Blaise Pascal (1623~1662) は、父親時代の René Descartes (1596~1650) を次のように批判する。

「私はデカルトを許せない。彼はその全哲学の中で、できることなら神なしですませたいものだと、きつと思っただろう。しかし、彼は、世界を動きださせるために、神に一つ爪弾きをさせないわけにはいかなかった。それからさきは、もう神に用がない

のだ。」B版77

そしてこの神を用無しにした世界に向かって、
「この無限の空間の永遠の沈黙は私を恐怖させる。」『パンセ』B版206

と言う^(註27)。このパスカルの言葉は、ガリレオ以来の近代自然科学の自然像がもたらしたものに對する、最も初期の反応の一つと考えられる。

現代の例として、例えば アインシュタイン(1879～1955)は、タゴールとの対話では、人間から独立した物理体系を主張する。^(註28)

だが一方、自然を神から解放し自立させたことは、自然法則を知ることによって自然を人間のために利用する道を開く。つまり、自然はひたすら人間のための存在と化する(「神」を追放しても、「超自然」の信仰が形成した構造は存続する、すなわち今度は人間が「神」の地位を得る)。この「利用」は原理的には無制限である、自然そのものを破滅させない限り。それでありながら、その自然像は人間には本来関わりのない自然を表現している。

自然の死が徹底すれば「おのづからなる」への信も消滅する。現在の我々に「おのづからなる」(伝統)の自覚をし難くしている理由の一つは、この「自然の死」である。一方で「富士山」を世界一汚れた山にしているのは、この伝統へのもたれかかり(「甘え」と解釈できなくもない。

【8】月の兎とお化け

「お月さまには兎がいる。」

この月の兎は人間の月面への一歩で最終的に碎かれてしまった。あるいは、明るい太陽の光を浴びて、生きているという生命感を実感したとしても、太陽の光そのものにはそのような意図はない。我々がそう勝手に思っているだけだ。(太陽の光は「客観的」で、我々の思いは「主観的」とされる。)

こういう「思い」が我々の心に忍び込んでくる。心のどこかでささやく。あるいは、太陽は生命の根源であるという自然認識もあるかも知れない。だがあまりに日の光りを浴びると病んでしまうか、死を招く時もあるという「認識」も我々は同時に持っている。つまりこの近代現代版自然観は、《自然は人間とは無関係である》という意識を伴っているところに、その特徴がある。結局我々は、そのような

太陽に(ひいては生命そのものにまで)意味(目的)を見出すことが出来ないのである。自然科学はそのような目的や意味からは独立したものだと言われるであろう。しかしそこに大きな問題がある。この無-目的、無-意味が自然科学の外の我々にも同じ意識を与えている、ということは疑い得ない。ここに我々が抱えている虚無の一つがある^(註29)。

現役の自然科学者達がどのように考えているのかを我々が知ることは難しいが、我々は自然は自動機械であるという自然観にどっぷりと浸されている。自然から「お化け」が、「兎」が追放されてしまったのである。

もちろん、月の兎を否定する考えは、月面着陸よりはるか以前から存在したであろう。ただこの達成により最終的に碎かれてしまった、という思いの意味は考えなければならない。ここには少なくとも一つの前提が潜んでいる。それは、自然科学が「本当」の「事実」を明らかにしていき、「迷信」ないし「非科学」は否定されなくてはならない、という前提である。

しかし、私には、人類がこの前提を真剣に考え、その意味するところを追究してきた、とは思えない。

お化けや兎の追放でことは一件落着となるのであろうか、ということも一考の価値はある。お化けも兎もどこかでしぶとく生きているのではなかろうか、とみずから問うて、これを人間の度し難い頑迷性と見て済ますことができるのであろうか。先の「ささやき」がいつでも耳にまとわりついていて、我々はこれから逃れる術を今のところ見出していない。つまりは、この「ささやき」が彼らを惨めなところへ追い込んでいるのだが、彼等は「迷信」として否定されるべきなのか、それとも彼等を迷信と決めつける見方には全く問題が無いのか。このような疑問にも意味があると考えられるのである。

以上は、お化けと月の兎の「復活」を主張しているのではもちろんない。これらが「存在」した(人間としての)理由を改めて考えることにも意味があるのではないか、との提案だが、それだけではなく、これらを否定した考え方そのものにも反省が必要ではないかと提案したいのである。

お化けなどの「迷信」は自然科学の問題ではない、と切って捨てる「自然科学」だけが自然科学なのか、という疑問を払拭できない感が強いのである。かつ

て「火の玉」を実験室で実現し、単なる物質現象であると「証明」した「自然科学者」が存在したが、私にはこれは見当違いと映る。

言い換えると、お化けや月の兎にも「歴史」があり、長い年月に渡って人々のところがそれに「色づけ」してきたことの意味は無視できない。それらは、一面で人々のところの要求が生んだとも考えられるが、現在は全く必要ない、と言い切れるかは疑問である。

以上は、これまでの叙述で明らかであると思われるが、お化けや月の兎の意味を考える、ということに留まらず、(迷信や非科学的という考え方も含めて)自然科学とその見方の人類にとっての意味を、ここで立ち止まって、考える必要があるのではないか、ということでもある。

【9】反自然

自然と人為・人工・文化の境界線は明確であるように、ほんねとたてまえのように、よくよく考えていくと、曖昧な様相を呈してくる、と言わざるを得ない。「おのづから」と「みづから」の同異も我々現代人にはあいまいになりつつある。つまりこういった問題は、現代の問題なのである。

例えば、原始林・原生林とは、未だかつて人間が足を踏み入れていない、その手が触れていない森林のことであるか。では、現代世界において、ある原生林をそのまま残す、保護するとした場合、「人間の手」はどういうことを意味するのか、を考えると、結局人間の側の都合を出ないであろう。人間中心の視点から見ているに過ぎないのである。

試みに猿が棲息したことのない森林を考えてみよう。この森林は猿にとって「原生林」であるか。では、猿にとっての原生林と人間の言う原生林の根本的な相違は何か。猿にはその原生林を破壊することは出来ないが、人間には可能であるということもその相違の一つである。可能どころか破壊し続けている唯一の動物である。

だが、原生林については、また別の面も言えるであろう。すなわち、「田園」生活が「自然な」人々(文化)がかつてあったことは確実である。原生林は人間には「住みにくい」。原生林が、元々そこに棲息・生育する動物植物には「住みやすい」のは「自

然な」ことである。この意味では原生林は人間には「自然」ではないのである(ここの「自然な」「自然」は natural よりも「おのづから」に近いことに注意されたい)。

人間に飼われた動物はもう自然には戻れないと言われる。このように見てくると、人間だけが自然に反するところを持っている、ということを考えてみることも必要である。つまり、人間は本来反自然の要素を持っていると、試みに考えるのである。だからこそあれほど「自然」を慕い、求めるのであろう、とも考えられる。こう考えてくると、人間は自然と反自然を内に蔵することになる。

すると、人為、作為と人間の反自然との関係を考えていかなければならないことになる。

例えば、唐突の観を免れないであろうが、ニューヨークの摩天楼街は、現在では世界の至る所にその類似物が頻出して、今や死語になりつつあるかも知れない。しかし、あのような姿をよくよく考えて見る必要がある。《人工のみ》に近いであろう。このような物を(本筋として)作りだしている文明というものを考えるべきである。先のように考えると、これら「摩天楼」は「反自然物」とも言えよう。以上は、短兵急に「摩天楼」を否定しているのではなく、この「文明」の姿を一度考え直してみようということである。ここで例えば、「なるの余白構造」を参照項として考えて見ると、ここには「する・つくる」が満ちあふれていて、「余白」に余りに欠けている印象が強い。《人工のみ》は当然《人間のみ》である。超越の喪失である。

次に、「摩天楼」という極端な例ではなく、我々が日々生活の場としている人家を例に取ることしよう。

蜂の巣は自然 natural で、人家は人工 artificial (culture) である、とするのは「常識」であろう。

だが、環境を自己の生存の都合(必須条件)に合わせて変形・加工する点では同じことではないのか^(註30)。このような疑問は、「西欧」よりも、「おのづからなる」の発想から出てくる可能性が強いのである。何故なら、すべてが「なるもの」として捉えられているからである。とすれば、相違はないことになるのか。蜂の巣ではなく、蟻の巣である方が、一見、この相違は明らかに思われよう。蟻なら、一応、土を変形加工しただけとすると、人間の家は、洞窟な

どの利用ならともかく、建造物を「創造」したのではないか、との反論はあり得る。しかし、蟻の巣を蟻の「創造」とは言えないのであろうか。

人間と Nature を厳然と区別する発想からすれば、両者を分ける分岐点は人間の「つくる」行為（道具と技術）ということになる。つまり、その場合、人間は何らかの程度で自然から自らを「引き離し」、「自然を超えた」働きを可能にしなければならない。自然には存在しない物を作り出さなければならない。それが Technology とうことであろう。

すると、違いは人間とそれ以外という二分法になるのか。それは、ほとんどの場合、人間と動物の二分法であろう。ところが、厳然たる区別を付けたい西欧人の大変な努力にも関わらず、人間と動物の区別はいまいさを残している。動物にも文化はあるか、などという問も出てくるのである。

しかし、以上は一つの観点を無視している、と言われるであろう。それは Instinct 本能概念である。人間以外すなわち自然の生物は本能で何かを作り、人間は（意識あるいは自覚した）技術による点で大いに相違する。だが、これで解決かという、人間にも本能が言われることもあるだけでなく、それに留まらない本能概念のあいまいさ（多義性）が残されている。とすると、本能概念を持ち出しても未だ解決ということにはならない。

だが、人間とそれ以外の二群に分けて、両者の相違はどこにあるのか、という問はもちろん無効ではない。それどころか問題は新しい局面を開く、とも言えよう。すなわち、ある地点で、両者は分かれていき、人間はその他と全く異なることを始めた、という視点は可能である。つまり人間は「墮落した」動物ということになる。しかし、この分岐点は「どこ」にあるのか未だ人類は認識していない、と言わざるを得ないであろう。

別の言い方をすれば、始めから人間は自然破壊をしているという見解を取らぬ限り、「どこ」が自然破壊の起点なのか、という問である（道具を分岐点に挙げる考えは既に存するが、ここでの分かれ道は、主として反自然という観点からのものである）。

その一つの「答」として、技術が自然には消化不能の物を作り出した時という見解が考えられるが、技術はまた、自然の不消化物を自然が消化できる物に変える「革新的技術」を予想しているかも知れな

い。例えば、CO₂ を自然と人間に無害な物質に短時間に変換する低費用の技術が発明された暁には、この CO₂ に関する問題は解決とされる可能性は十分考えられるのである。すなわち現在までの「技術」は人間の都合を未だ脱していない。

このような疑問を誘発する原因の一つは、根本から考えていないことにある。現在ごく普通に言われている一つの例をあげると、「自然との共生」という思想すら、「自然」（おのづからなる）への信から見れば、不十分と映るであろう。根源に生かされているとの「信」からすると、根源と共生という捉え方では、そのことを忘れる可能性は十分あると考えられるからである。

【10】天動説と地動説

人間の事実は自然科学の事実とは異なる場合もあると考えなければならない。人間の事実として月の兎は存続していくであろう。

ではここに言う「人間の事実」とは何か。一つの分かりやすい例として天動説をあげたい。天動説は地動説によって全く否定された、とは常識であろう。ところが、我々の肉眼で見ると、動いているのは太陽であって、我々が立っている大地ではない。当たり前で事々しく言うまでもない、と言われるであろう。だが我々の眼には、東から上がって西に沈む太陽、天空を回っていく太陽、としか見えないが、動いているのは地球なのだという「知」は、我々の日々の生活で何か意味を持っているのであろうか。役だっているのであろうか。こう問うことにも意味があるのではなからうか、と一歩立ち止まる必要がある。

この「知」は自然科学者の認識の結果であって、我々が認識したのではないことが肝要である。また地球が回っていることは、まずそれを実感することなく、また想像しにくいことである。すると極言すれば、我々は「宙ぶらりん」な状態に置かれていることになる。地球の運動は実感できず、太陽が動いているという実感は「知」により否定されている。地動説以後、人々は太陽が天空を動いていく《実感》を持ちながら、「本当」は地球が動いているのだ、と思っているのかも知れない。しかし、私には、「思っている」ではなく、「思わされている」と映るのである。この「実感」の否定は大きな問題である。

もちろん、天動説が現代の自然科学の理論としては認められないことに異を唱えているのではない。ただ、上に言った意味での「人間の事実」までを全く自然科学の見方の下に置くことは、自然科学のいわば一種の「帝国主義 Imperialism」に導く危険性があると考えているのである(註³¹)。つまり先の《実感》を単に虚偽であるとするのは、自然科学の越権行為であるとする。

断るまでもないが、ここで言う自然科学は、主に、その探究が発展し続けている自然科学というより、それが人々に及ぼしている現実の作用としての、ということに近いが、あるいはこれは自然科学「教育」にも関係しているかも知れない。

すると、問題解決の方向は、自然科学内部と日常生活の「常識」との領域分担を認めることにある、と考えられる。そんなことは始めから厳密に区別されている、という反論を受けるかも知れないが、現実には先述の「ひややかな認識」は存在しているのだから、この反論は無効である。つまりこの仮想された「反論」が考えていないことを考えようということである。私は、解決の第一歩は、自然科学は人間が取り得る《一つ》の「見方」である、と自然科学みずから認めることであるとする。こう考えるのは、自然科学と技術が、人類の歴史上類を見ない程の現実激変をもたらしてきた事実を痛感するからである。断るまでもないが、自然科学として、今更天動説を認めよ、と主張しているのではなく、この「ひややかな認識」をどう解決していくか、つまり「自然の死」をどう克服して行くかということに尽きるのであり、我々全体の問題であるとしても、とりわけ自然科学が考えるべき課題でなければならない。

上の「見方」という考え方には強い反発があるかも知れない。また、一口に「自然科学的見方」と言っても、自然科学者と、その影響を受けている非-自然科学者では異なるところがあるだろう。したがって、両面から考える必要がある。

さらに一例をあげると、いわゆる今西進化論を自然科学ないし生物学の領域から排出するか、あるいは別種の自然科学であるとするか、それはこれからの課題でなければならない。今西錦司の理論を例えば「文学的」と評して排撃しても解決にはならない、と考えるべきである。これらのことを考えることは

自然科学の自己認識の糸口となり得る。

自然科学は、現在、自然探究の道をひたすら歩むだけでなく、人類に取っての自己の意味を認識すべき時に差ししかかっているのである。これは単にその負の面を検討せよ、ということではない。それでは一種の対症療法に留まってしまおう。さらに言えば、それはひとり自然科学の問題であるに留まらず、我々人類の、文明の課題と考えなければならないのである。

以上は私達の「内なる古代日本人」が、現代人の私達に訴えている、ということであるかも知れない。

【終わりに】

これまで粗い素描をしてきたことは、それぞれ詳細厳密な検討が要求される、我々が悩みながら追求すべき課題への提案である。したがって個々には訂正すべき点や、否定されるべき過誤などもあるであろう。ただ、提案の方向は間違っていないと信じている。

各節が中途半端の感を与えたとしたら、それはわたくしが未だ答の糸口さえ見いだしていないこともあるが、「はじめに」でも述べたごとく、提起した問題が個人の能力を超えたところがあることにも困っている。

【註】

記紀風万の文献は、主として岩波古典文学大系本に依る。それは、国文学研究資料館が大系本をデジタル化したものをも利用したからである。引用の仕方は、訓読本文を主とする。原本の訓を()内に記す。現在の読み方と非常に異なる訓は原文のまま()に記す。

国文学研究資料館：<http://www.nijl.ac.jp/index.html>
kokin@nijl.ac.jp

- (1) 「自然」という用語については、例えば前拙論「ナルの自覚---方法論の私的試み」(三)節「ここで現代日本語としての自然について簡便な説明をしておく、それは古代日本語から生き続けているオノヅカラと幕末以降急激に輸入された Nature 概念の《混合物》であ

- る。したがって、オノヅカラ概念としても、Nature 概念としても徹底していない「あいまい」な混合概念となっていることから何らかの制限が必要である。叙述の利便を考へて、仮にここでは、一般的使用の範囲では自然、「オノヅカラナル・おのづからなる」働きの意味では「自然」とする。〔『東京工芸大学工学部紀要』人文社会編 Vol.31 No.2、2008〕
- (2) ナルの余白構造については、例えば拙論「古代日本の神「ナル カミ」について」〔『東京工芸大学工学部紀要』人文社会編 Vol.23 No.2、2000〕を参照されたい。
- (3) 丸山眞男「歴史意識の「古層」、筑摩書房 日本の思想6 1972 所収；丸山眞男は「持続低音」という言葉を使用している。
- (4) 谷崎潤一郎「恋愛及び色情」新書版全集 17、220 頁下と上。
- (5) 岩波古語辞典
- (6) 花山信勝『平和の発見ー巢鴨の生と死の記録』記載とされるが、原本を見ることができなかつた。この語が事実そのままかどうかは問題ではあるが、ここでの関心からすると、このような表現が日本語として可能であることに注目した。次の註7に挙げた『広田弘毅』にはこの語は見られない。
- (7) 服部龍二『広田弘毅』中公新書、2008、p.262 「朝日新聞1948.1.13」
- (8) 『自然学の提唱』『増補版 今西錦司全集』第十三巻所収 1993.8、p.13；講談社学術文庫版1990.10、p.22
- (9) 同前 p.38f、p.51f
- (10) 同前 p.18、p.27
- (11) 岩波日本古典文学大系66『連歌論集 俳句論集』p.401
- (12) 「ナルの自覚---方法論の私的試み」『東京工芸大学工学部紀要』人文社会編 Vol.31 No.2、2008
- (13) 「アシカビについて」2節『東京工芸大学工学部紀要』人文社会編 Vol.30 No.2、2007
- (14) この古語「マニマニ」もオノヅカラナルの語彙圏に属する。
- (15) 後述の「西欧の相対化」という本小論の主要提案からすると、この「西欧」の「明晰判明」の意味も再考すべきものとする。
- (明晰判明の否定ではなく、明晰判明の半面を考へよう、ということである。)
- (16) Immanuel Kant "Kritik der Urteilskraft" 1790、s.390 (頁は1793版のもの)
- (17) Kant、ibid. s.396
- (18) Kant、ibid. s.402
- (19) Kant、ibid. s.420
- (20) Rudolf Otto "Das Heilige" 1936、特にその17章、S.143ではVorhof(前庭)という語が使われている。
- (21) しかし「常識」としては未だ生き残っているかも知れない。例えばEinsteinの「宗教論」ではこの恐怖説が取られている。Albert Einstein "ON COSMIC RELIGION" 1931 [Dover 2009版 p.44]
- (22) 試みに以下数箇所、ヘブライズムの伝統、「おのづからなる」の伝統という語を使うことにする。
- (23) 『東京工芸大学工学部紀要』人文社会編 Vol.26 No.2、2003
- (24) 西谷啓治著作集 第11巻所収 p.163
- (25) オノヅカラナル働きに対する根源的直観を「信」としたが、それは根源的居場所への信である。「信仰」という自覚的形態を取る場合もある、と考えられる。
- (26) 管見では、この「自然の死」に近い事象を、接近の方法は異なるが問題として論究しているものに、大森荘蔵『知の構築とその呪縛』1994 ちくま学芸文庫版があるが、今回は検討できなかった。
- (27) 日本語訳はパスカル『パンセ』前田陽一訳 中央公論社世界の名著に依る。
- (28) 岩波講座『宗教と科学』別巻2、イリヤ・ブリゴジーン「単なる幻想」の付録、ターゲットとアインシュタインの対話 p.282~287。ただし原文を見ることはできなかった。
- (29) 西谷啓治であればこれをニヒリズムと呼ぶであろうが、NihilismusはNietzscheの主要概念であることを考へると、一応ここではその語の使用を控えることにした。

- (30) 辞書 COD の説明では、この英訳に art 関連の語は使用出来ない、何故なら art は human skill or workmanship as opposed to the work of nature, human creative skill or its application であって、自然と人間両方に兼用出来ない人間専用の言葉とされている。この説明がどの程度の普遍性を持つかにわかには決められないが、一つの参考例として挙げた。
- (31) 言語現象にすべてを還元する類の言語学、同じくすべては社会現象と規定する類の社会学などの「帝国主義」、あるいは意識ですべてを理解・説明しようとする意識の「帝国主義」など、現代にはそのような傾向が著しい。これは「平衡感覚」が不健全な証拠である。